

「悪」と心理療法

廣澤愛子

Aiko HIROSAWA

教育臨床学講座

1. はじめに

心理療法を行うなかでしばしば考えさせられる事柄の一つに、人間がおかす「悪」の問題がある。たとえば、うそや盗みを頻繁に繰り返し、どうしてもそれをやめられないことが問題となって来談する人がいたり、他児にひどい怪我を負わせるような暴力を振ることが問題で相談室に連れてこられる子どももいる。あるいは逆に、ひどいいじめに遭ってこころの傷を負い、不登校になってしまった子どもや、養育者から虐待を受けて育ち、基本的な信頼感や安全感を育むことが出来ないためにうまく日常生活が送れない、というような人が相談に来ることもある。その他にもさまざまな相談が持ち込まれるが、こういった人々の心理療法を行っている、人がいかに多くの「悪」をおかしているのかに気付かされ、また同時に、その「悪」によって人がいかに深く傷ついているかを知り、自分も含めた人間の業の深さについて考えさせられる。

そこで本論では、人間の「悪」について、心理療法を通して見えてきた事柄に基づいていくらか考察したいと思う。すなわち、人間が「悪」というものにどのような影響を受けているのか、そしてそのような影響力を持つ「悪」とどのように関わっていくべきなのか、について論じる。但し言うまでもなく、「悪」というテーマはとても深淵で、ここで論じ尽くせるようなものには到底ない。したがって、ここで述べる事柄が「悪」に纏わるほんの部分的な考察であることを断っておきたい。

2. 「悪」を知ること

「悪」の問題を考えるにあたって、まず「いじめ」を取り上げてみよう。「いじめ」という現象は、いじめめる側、いじめられる側、見て見ぬふりをする傍観者、いじめをおもしろがって見ている観衆、の4者構造からなると言われているが⁽¹⁾、これら4つの立場のどれも一度も体験したことがない、という人はほとんどいないであろう。何らかの立場で、いじめを体験していると思われる。筆者が大学生300人程度に対して、これら4つの立場のどれかでいじめを体験したことがあるかをアンケート調査した際には、これら4つの立場のうち、1つも体験したことが無いと答えた学生は一

人もいなかった。しかし注目すべきは、傍観者という立場でしか体験したことがなく、いじめについて見聞きしてはいるものの身をもって知っているわけではなく、あまり深く考えたことがない、という人がかなり多く見られたことである。

「悪」を知るといっても、これは知的に理解されるようなものではなく、自分が身をもって体験していなければ、知ることができないものである。いじめはもちろんないほうがいいし、いじめを身をもって体験しておいた方がいいなどと言うつもりは毛頭ない。しかし、「悪」を身をもって知るといふ体験を全くしていないのは、やはり問題だと思われる。

「悪」を身をもって体験していると、自分が「悪」をおかしたときに感じる罪意識や、自分が「悪」にさらされた時に感じる辛さが分かる。そのような体験は、「悪」に対するある程度の免疫力と、自分が「悪」を行使することに対する抑止力をもたらしてくれる。むしろ、このような「悪」の体験的学習が少なすぎるがゆえに、昨今のいじめが激化しているとも言えるだろう⁽²⁾。死に至るほどの暴力を振るいながら、「まさか死ぬとは思わなかった」といういじめの加害者の言葉をしばしば耳にするが、そのような実感の無さや、筆者が行ったアンケート調査で、いじめについてあまり深く考えたことがないという、我関せずというような態度が比較的多く見られたことの背景には、「悪」を知るという体験の希薄さがあるのではないかと推測される。

心理療法の場合でも、「悪」を体験せずに大人になった人が来談することがときにある。Aさんもその一人であった。

Aさんはこれまで、自分自身はいじめについて深く考えたことがなかったが、自分の子どもが小学校でひどいいじめに遭い、子どもを通して、初めていじめの被害に遭うということがどれだけ辛く苦しいことかを体験する。そして同時に、いじめっ子たちに対して激しい憎悪を感じ、生まれて初めて、自分の中にこれほど強いどろどろとした感情があったのか、と気付かされるのである。Aさんはこれまで、人を憎んだり嫌ったりする気持ちがよく分からず、誰とでも仲良く、平和に暮らしてきたという。しかし、いじめという人間の「悪」の犠牲になる出来事を通して、生まれて初め

て、自分自身の中に「憎悪」という感情が芽生えた。つまり、他者と自分双方の中に潜む「悪」を、身をもって知る体験をしたのである。これまで「悪」に本当の意味で触れたことのなかったAさんにとって、このような体験は、自分の存在を根底から揺さぶられるような衝撃的な体験となった。しかし、このような体験を通して、Aさんは、人間というものに対する理解がより深まり、地に足のつかない理想論ではなく、現実に根ざした認識力や洞察力を身につけるようになり、よりどっしりとした深みのある人へと変容していった。

ここに挙げたような例でなくとも、なんらかの形で、多くの人が「悪」を知る体験をしていると思われるし、体験している必要があるとも言える。そのような体験は人により深い認識を与え、人を成長させる。逆に、そのような体験の希薄化は、先に述べたようないじめの激化など、さまざまな問題を引き起こす。しかし現代社会においては、「悪」の体験の希薄化や「悪」に対して無自覚な態度が優勢になってきている傾向が感じられるので、次章では、「悪」への無自覚さが引き起こす問題について、より詳細に考えてみたい。

3. 「悪」への無自覚さが引き起こす問題

「悪」に無自覚であるときに引き起こされる問題として、2点に分けて論じたいと思う。

まず1つ目は、「悪」に無頓着すぎて、知らず知らずのうちに「悪」の被害に遭ってしまうかもしれない、ということである。これは、先ほどのAさんが当てはまる。悪意や憎悪といった感情と無関係に生きてきたAさんは、誰とでも親しくなり、誰に対しても個人的な話を打ち明け、皆で仲良くしようとしていた。また、子どもへの教育も、現実にそぐわないような理想論を掲げていた。このようなAさんの悪意のなさや無防備さは、彼女が、子どもがいじめに遭うという「悪」の体験に巻き込まれたことと無関係ではないだろう。しかし、Aさんの場合、子どもがいじめに遭うという体験を通して、遅ればせながら「悪」を知ることになり、また心理療法を通して、安直すぎる理想論を捨て去り、適度に身を守って他者と距離をはかりながら接するすべを身につけることができた。その後は、現実場面でも「悪」に巻き込まれることは少なくなっている。

次に、2点目として指摘したいのは、1点目に取り上げたような、自分が「悪」の被害に遭うということとは逆に、自分が、他者に対して悪意なく「悪」を行使してしまうかもしれない、ということである。つまり、加害者の立場にたつことがあるかもしれない、ということである。この場合はたいてい、大義名分の元に「悪」が行使される。このことは、いじめがなんらかのもっともらしい理由をつけて行われることが多い、という事実にも見て取れる。そしていじめられる側にも原因がある、というような論理がまかり通って

しまうのである。もちろん、いじめに限らず、より大きな社会に目を向けてみても同じことが行われている感があり、戦争や民族紛争が行われる際にも、「〇〇国の民主化のため」、「〇〇国の平和のため」などと言われる。このような正しい理由に基づいて戦争を行い、その中で殺戮行為を繰り返したとしても、その行為は正当化されるのである。つまり、悪意のない「悪」なのである。もちろんそれは、正しい理由に基づいて間違った行為をしているに過ぎないのだが。

人も社会も、自分自身の中にある「悪」を認識することが最もつらい。それゆえに、それを避けて誰かのせいにして、大義名分の元にその誰か（他国）を攻撃してしまう。このようなことが、対等な1対1の関係の中で行われる（たとえば、1対1の喧嘩など）であれば、さほど大きな問題は引き起こされない。人は、多くの場合、自分の中にあると認めがたい特性（多くの場合、欠点）を相手の中に見て、相手を攻撃してしまう。それを臨床心理学では「投影性同一視」と呼ぶが、このような場合は、実は相手の中に見ていた特性は自分の中にあるものだったと認識することが必要である。これを「投影の引き戻し」と言う。これは、自分の中にある、認めがたい「悪」を受け入れなければならないのでとても辛い作業となるが、集団の中でそのような「悪のなすりつけ」が起こる場合ほど、他害的な被害は大きくない。しかし先に挙げたような戦争や民族紛争、卑近な例を挙げれば、いじめや虐待といった現象は、集団における「悪のなすりつけ」である。ナチスドイツのユダヤ人に対するしうちはあまりにも有名であるが、すべてはユダヤ人の「悪」のせいだとして、自分たち自身が行っている殺戮行為がいかに「悪」であるかには目もくれずに、自分たちの行為を正当化し、凄惨極まりないことを行った。そしてユダヤ人を悪者にして、自分たちの集団の凝集性を高めていった。学級や社会で起こるいじめや、家庭内で起こる虐待も基本的にはこれと同じ現象である。これがいわゆる、「スケープゴート」である。

スケープゴート現象は、特別な人だけが起こす特別な出来事では決してない⁽³⁾。人が集まる場所では至るところで起きている現象であり、現代社会における「悪」の対処の仕方は多くの場合、このスケープゴートというやり方になっている⁽⁴⁾。つまり、集団においては、非常に多くの人から自らのうちに潜む「悪」に無自覚・無頓着になり、一部の人の中に自分たち一人一人のうちに潜む悪を見て（投影性同一視して）、その一部の人を攻撃する、というスケープゴート現象が起きているのである。しかしスケープゴート現象が、このように、自分たちの内に潜む「悪」への無自覚さによって引き起こされていることを考えると、「悪」を知るという体験は、たとえどんなに衝撃的なことであっても人間にとって必要なことであり、その体験を

通して、自らの内にある「悪」を認識する目を持つことは重要である、と考えられる。

4. スケープゴートに見られる「悪」の実態 —虐待を取り上げて—

前章で、「悪」への無自覚さが引き起こす問題として、スケープゴート現象に触れた。現代社会において「悪」を知るという体験が希薄化する一方で、スケープゴートの被害者は、想像を絶するような強烈な苦しみを通して「悪」を知る体験—いや、むしろ「悪」の犠牲になるという体験—をしている。たとえば、いじめや虐待もスケープゴート現象にあたるが、いじめや虐待の被害に遭うということは、「悪」を知るなどと簡単に言えるような体験ではなく（もちろん、「悪」を知るという体験も衝撃的なのだが）、この世で生きていく力を根こそぎ奪われるような、こころも身体も深く傷つけられる体験であると言える。近年、トラウマや PTSD という言葉が一般的にも使われるようになってきているが、いじめや虐待の被害に遭うとは、まさしくトラウマティックな体験である。心理療法においても、そのような体験をした人々のこころのケアについて、主としてトラウマという視点からさまざまなことが考えられている⁽⁵⁾⁽⁶⁾。

心理療法の現場でいじめや虐待に遭った子どもや大人と会っていると、セラピスト自身も、その体験の壮絶さにおそれ慄く。そして、彼らが体験したであろう恐怖、戦慄、絶望感、空虚さ、切迫感、憤り、哀しみ…などさまざまな感情を味わうことがある。そして、いじめや虐待という行為を通して見えてくる人間の「悪」のすさまじさに、思わず目をつぶりたくなるのである。

これまで筆者は、虐待を受けた子どもの心理療法について考える際、「スケープゴート」という視点を取り入れてきた⁽⁷⁾⁽⁸⁾。もちろん、トラウマという視点も適宜取り入れたが、筆者が担当してきたケースにおいては、虐待というトラウマティックな体験とどう折り合い、どうこれからの一歩を踏み出すかという際に、虐待という行為を通して目の当たりにさせられた人間の「悪」とどう向き合い、折り合いをつけていくのかということがテーマになることが多かったためである。また、いじめを受けた子どもやその母親の心理療法においても、やはり、人間の「悪」のすさまじさや、自分自身の中にある「悪」と他者の中にある「悪」について考えることがテーマになることが多かった。

では、いじめや虐待といったスケープゴートの被害に遭うという体験を通して目の当たりにさせられる「悪」とは、一体どのようなものなのだろうか。虐待を例として取り上げて、少し具体的に見てみよう。

虐待については、ニュースやテレビでも度々報道されており、多くの人が少なからず耳にしているだろう。

最近の虐待事件で記憶に新しいのは、平成16年に起きた岸和田市の中学生虐待事件である。報道では、聞くに耐えないようなすさまじい虐待が明らかにされており、養育者が中学3年生の長男に殴る蹴るの暴行に加え、部屋に軟禁して数日間絶食させるなどの虐待を行っていたという。長男は、身長155センチに対して体重が29キロ、餓死寸前であり、皮膚の一部が壊死・腐敗していたと伝えられている。また、平成14年に生活安全局少年課が行った、虐待に関する調査の中に列挙されている事件を見てみると、“母親が、ミルクを与えても受け付けず泣き止まない乳児の腹部を踏みつけ、腹部打撲の内臓破裂に基づく出血により死亡させる”、“父親が、なつかず、外出時の支度も遅い幼児に腹を立て、頭部・顔面・胸部などを殴打、足蹴りするなどの暴行を加え、外傷性脳浮腫により死に至らしめた”など、ゾッとするような虐待の実態が明らかになっている。筆者が心理療法の場で出会う人はなんとか生き残った人たちであるが、きょうだいが親による虐待で亡くなっており、その現場を見ながら生き延びてきた子どもや、家族から性的被害を受けた子ども、食事や入浴などの基本的なケアが全く施されず、生きるか死ぬかのギリギリのところで生き残った子どもなど、保護された時には心理療法云々よりも、とにかく生命を守ることが第一というような人もいた。また、生命に関わるのがなくとも、親から「お前なんて生まれてこなければよかった」と言われ続けるという心理的虐待に相当するような養育環境で育ってきた人もいた。このような、目を被いたくなるような「悪」を前にして、我々は言葉をなくし、目を覆いたくなるような気持ちになるが、ここに記述してきたようなことが、彼らが目の当たりにさせられ、その犠牲になった「悪」の実態なのである。そして、このような「悪」を行使しているのも、またこのような「悪」の犠牲になっているのも同じ人間であるという事実が、重い現実としてのしかかってくる。

いずれにせよ、現代社会において、「悪」を知る体験が希薄化する中、スケープゴートの被害者—虐待やいじめの被害者—は、壮絶な苦しみを通して「悪」を知る体験をしていると言える。そしてこのような「悪」の犠牲になるという体験は、彼らに非常に大きな影響を及ぼす。次章においては、「悪」の犠牲に曝されるという体験が人に及ぼす影響について、筆者が、虐待やいじめの被害者の心理療法を通して感じたことに基づいて、4点に分けて論じる。

5. 「悪」の影響力 —スケープゴート被害を中心に—

虐待やいじめといった、スケープゴートの被害に遭うという体験は人にどのような影響を及ぼすのであろうか。以前に少し論じたことをベースにしながら⁽⁹⁾、

以下に4点に分けて指摘する。

まず1点目は、虐待やいじめの被害に遭うと、人は「自分が悪からこのような目に遭うのだ」、「自分はなんて醜く、汚れているのだろう」と、深い自己否定感や自己嫌悪感を抱くようになる、ということが挙げられる。そして、自分自身をみにくくあひるの子のように感じ、「忌み嫌われる自分」というアイデンティティを自ら築き上げてしまうのである。このようなアイデンティティのあり方を、「スケープゴートとの同一化」⁽⁹⁾と呼ぶ。

さらに2点目として指摘したいのは、虐待やいじめの被害に遭った人は、あまりにすさまじい「悪」の犠牲になるという体験をするがゆえに、自分自身がなぜこのような目に遭ったのかの意味付けをする際に、「忌み嫌われる自分」というアイデンティティすなわち、スケープゴートとの同一化のみならず、「自分は殉教者として選ばれた聖女だ」⁽¹⁰⁾というような、「スケープゴートにして救世主」⁽¹¹⁾という自我肥大したアイデンティティ感覚をも有することがある、ということである。これは、なんとか自尊心を保とうとする試みであると感じられるが、「スケープゴートにして救世主」というアイデンティティ感覚を有するようになると、一個人として対処できるはずのない、あるいは対処する必要のないような「悪」に対しても、過剰に責任を負おうとしてしまうのである。このようなアイデンティティ感覚を持ち続けることは、「悪」の被害に遭うということをその後の人生においても定着させてしまうことにつながるので、心理療法においては、このようなアイデンティティ感覚がなんらかの形で変化していくことが望まれる。

3点目としては、何のいわれもなく、自分がこの世へと生まれ出てきた源（母や家族）から徹底的に拒絶される一虐待を受けるという体験は、「自分が存在することへの処罰」⁽¹²⁾と感じられてもおかしくない、という点である。この世に自分が存在してもよいのか、存在する場所があるのか、という思いが常につきまってしまう。その結果、「自分にはこの世のどこにも居場所がない」という、想像を絶するような「実存的孤独感」を抱えることになる。学生時代にずっといじめに遭ってきたある女性も、「私には母校がない」と語った。つまり、母校と呼べるようなところの拠りどころ、帰属感が持てる場所がどこにもなかったというのである。

4点目としては、世の中にある、楽しさや喜び、やさしさといった「善」なる側面が信じられなくなる、ということが挙げられる。これは、虐待やいじめを受ける中で、死や暴力や破壊といったことが日常茶飯事であった人にとっては当然のことであろう。つまり、「死の側面—暴力や破壊、悪、苦しみ—」ばかりにリアリティを感じてしまって、「生の側面—楽しさや飲

びや癒し、善なること—」にリアリティを感じる事ができないのである。このことを、筆者は以前、「生と死が乖離（断絶）」している⁽¹³⁾、と表現した。

このように、いじめや虐待といったスケープゴートの被害に遭うという体験は、人に多大な影響をもたらす。これらの影響を受けた人は、この影響を今後の人生の中でどう意味付け、どう折り合ってゆくのであろうか。次章においては、その点について考察をすすめたいと思う。

6. 「悪」との新しい関係

いじめや虐待といった、スケープゴートの被害に遭うという体験を通して受ける影響力について、前章で4点指摘したが、実際の心理療法のなかで、これらはどのように変化し、また、その後のその人の人生に意味付けられていくのであろうか。これについても以前に少し論じたことがあるので⁽¹⁴⁾、それに基づきながら考察をすすめる。その際、筆者がこれまで担当してきた、虐待やいじめを受けた子どもの心理療法を題材とするが、子どもの心理療法は遊びを通して行われることが多いので、その遊びを中心に論じていく。子どもは遊びの中で、自分のさまざまなところの問題を象徴的に表現し、遊びの中で解決していくことが多い。つまり、遊びは単なるお遊びではなく、そこには、その子どものところの問題が投影されており、遊びを通して癒しがもたらされ、ところの変容が起こるのである。したがって、ここで論じる遊び（物語作成など）も、そのような観点から捉えていただきたい。

まず、B子の事例を取り上げる。B子は、学校で「ゴミ女」と呼ばれて長年虐められ、「自分なんて死んでしまえばいいんだ」と自傷行為を繰り返すことが問題となって、相談室を訪れた。心理療法開始後しばらくして、B子はごっこ遊びを始め、「乞食」が主役の物語を作り出す。そしてその「乞食」には、B子の自己像が託されている印象があった。

物語の中で、「乞食」は、汚れていると言われて皆に忌み嫌われ排除されていたが、「乞食」自身もそれに抗うことなく、自分のことを汚らわしいと思い、自己嫌悪で一杯であった（ここに、前章で指摘した「スケープゴートとの同一化」が見て取れる）。そして物語が展開していく中で、ますます「乞食」は虐められ、孤独な放浪生活が続き、B子自身もますます乞食を虐める（これは、B子自身が、これまでの人生において「乞食」に象徴されるようなアイデンティティを周囲から押し付けられてきたことに対して反発を示している、とも考えられるだろう。それはある意味大切なことであり、これまでの人生の中でB子は、たとえ押し付けられたアイデンティティが嫌でも、「嫌だ」と主張することすらゆるされていなかった。したがって、物語の中ではあるが、このように「嫌だ」と自己主張

し、押し付けられた「乞食」というアイデンティティを拒絶することは、自己主張のための大事な一歩だと言える。しかしあるとき、物語に変化が起こる。それは、「乞食」が飢えと暴力により瀕死の状態になり、軒先に身を横たえ、いよいよ死ぬというときに起こった。B子が乞食に食事を与えたのである。まさにギリギリのタイミングであったが、このときB子は、瀕死の「乞食」を救った一つまり、自己像が託されているB子自身を救おうとした一のである。

スケープゴートとの同一化が起こっている場合、まず、押し付けられた「乞食」というアイデンティティを拒絶する、ということが起こる。つまり、周囲の人から押し付けられた「乞食」というアイデンティティを、「それは私ではない!」と拒絶するのである。このような「個」としての欲求を主張することは大変重要であり、これまで、学級でのいじめという犠牲に曝され、自分自身の「個」としての欲求など主張することもゆるされなかったところから、初めて、「それは嫌だ」という自己主張の一步が踏み出されるのである。しかし、その後、B子は瀕死の乞食を救う。逆説的だが、押し付けられた「乞食」というアイデンティティを一旦拒否した後、今度は逆に、自ら「乞食」の存在を受け入れようとするのである。確かに、「乞食」というアイデンティティを拒絶し尽くしてしまうのは、そこに自己像を投影しているB子からすると、自分自身を根底から否定することになってしまう。その意味で、乞食を救ったことは、自らが抱えていた自己否定感や自己嫌悪感を乗り越えて自分を受け入れようとする、自己受容への一歩だと言えるだろう。

B子の物語の中で、救出された「乞食」はこの後、とても活発になっていく。乞食であることには変わりがないのだが、これまでの、虐げられし者という印象とは異なり、社会の辺縁を闊達に生きるアウトサイダーという印象へと変わっていくのである。「乞食」であることに卑下もせず、かといって、尊大ぶるでもなく、ただあるがままに生きるというイメージ…。このような「乞食」イメージの変化は、B子のところが、スケープゴートとの同一化から脱しつつあると同時に、スケープゴートにして救世主というような自我肥大したアイデンティティからも逃れられるようになっていくことを示唆している。実際、日常場面においても、B子の自己否定感や自己嫌悪感は少し弱まり、また、自分は選ばれし人間だからこのような目に遭ったのだし、そういう役割をまっとうせねばならないのだというような自我肥大したアイデンティティも感じられなくなった。そして、一人間としての自然な感情—これは嫌だ、あれは欲しい—が表現されるようになっていった。

次に、被虐待経験を抱えるC男の事例を取り上げる。C男も、心理療法の中でごっこ遊びを展開し、物語を

作成した。その物語の特性を一言で表現するならば、「自分はどこから生まれてきて、どこへ行くのか」という非常に哲学的なテーマであった。いろいろな登場人物が出てくるのだが、「僕はどこから生まれてきたの?」とか「私は、どこへ行けばいいのだろうか?」、「お母さんってなんだろう?」「僕のお母さんはどこ?」といった台詞が何回も聞かれた。そして、それらの台詞の中には、自身の存在のはかなさや、この世で定位する場所のないところもとなさなどが強く感じられた。前章で指摘した、「実存的な孤独感」がこれに当てはまるだろう。そのような孤独感や基盤のなさは、いくつかの問題点が改善されて心理療法が終了する際にも、C男から消えてなくなることはなかった。スケープゴートとの同一化からも逃れ、闊達なアウトサイダーとでも言うべき新たなアイデンティティを身につけた後でさえ、そのような「孤独感—基盤のなさや空虚感、欠落感など—」は根強く残ったのである。

秋田は、「Disfigured Hero」という概念を提唱しているが⁽¹⁰⁾、これは邦訳すると、「欠落のヒーロー」とか「傷を生きる英雄」と言った意味になるそうである。そして、「Disfigured Hero」は、「神ならぬ、欠けた人間が、その欠落のままに生き抜こうとする」のであり、「回復されることのない空虚を生きぬくことで自らを成り立たせる」のだという。秋田の指摘していることは、虐待やいじめといったスケープゴートの被害者の心理療法においては、特にここにとどめておく必要のある考え方ではないだろうか。C男のここに残り続けた「実存的な孤独感」は、少なくとも、筆者との心理療法のプロセスのなかでは埋まるものではなかった。このような孤独感—基盤のなさや空虚感、欠落感—が埋まらないものである場合には、それを抱えて生き抜いていく姿勢が共有されることが必要不可欠なのである。埋まることのない孤独感を抱えて生きるという在り方は、先ほどのB子の事例において、「乞食」に表されるような自己イメージを最終的には受け入れていく、ということともつながるであろう。もちろん、同じ「乞食」でも、その在り様が闊達なアウトサイダーという性質に変化していることが重要なのであるが。但し、C男のようなケースのみならず、このような「実存的な孤独感」を感じつつも、「これから自分の居場所を見つけるんだ!!」というパワーのある人もいる。これは筆者の雑感であるが、男児よりも女児に、このような強さを感じさせる子が多い印象がある。性差というものがあるのかどうか科学的な根拠はないが、女児の側は将来的に「産む」ことのできる性であることが、この世とのつながりの強さや安定感につながっているのかもしれない。

最後に、虐待やいじめの被害者が「死—暴力や破壊、悪、など—」の側面ばかりにリアリティを感じているという点についてだが、これも、虐待を受けた子ども

(大人)の心理療法の中でしばしば感じられることである。被虐待経験を抱えていたC男の心理療法における物語の中でも、暴力を振るわれて怪我をすとか、攻撃されて死んでしまうといったストーリーが延々とリアリティをもって繰り返された。そこには、助けてくれる人はほとんど現れなかったし、たとえ現れたとしても、そこにリアリティは全く感じられなかった。このような物語を繰り返しながら、C男は、虐待を受け続けるなかで、生きるか死ぬかのギリギリのところでもいつも生きてきたのだという「C男のあるがままの人生」を表現していた。少なくとも筆者はC男の物語に耳を傾けながら、そのように感じていた。しかし、このようなC男の物語にも、あるとき変化が訪れる。それは、物語の中で悪者が「オナラ攻撃」をしかけてくるようになってしばらくしたときのことであったが、悪者のオナラ攻撃と全く同時に、偶然にもC男自身がオナラをしてしまうのである。これまで、暴力につぐ暴力という、緊迫感で一杯の物語であったのに、C男がオナラをした瞬間、思わず、C男も筆者も笑ってしまう。そして、この笑いによって、初めてホッとした空気が流れ、これがきっかけとなって、笑いや愉しさ、ゆるやかな気分、などが物語の中にも生まれるようになる。そしてその後、長いプロセスの中で、徐々に、援助の手を差し伸べてくれるような人や動物などが物語に登場するようになり、また、筆者との関わりの中で、あたりまえの親切さというものを知り、C男のこのころの中に、いわば「生の側面—楽しさや喜びや癒し、善なること—」が少しずつ根付いていった。この後、C男の物語は、「死や悪に纏わる側面」と「生や善に纏わる側面」の両方がつながりつつ流れていくようになり、生と死の繰り返しというあるがままの自然の流れが感じられるようになった。あくまで、死だけでなく生だけでもない、その両方が同じ重みで語られている、という印象であった。現代人は生と死が乖離し、生の方のみが評価されがちであるが⁽¹¹⁾、本来はこれら双方が表裏一体の関係となって、存在しているはずである。虐待やいじめといったスケープゴートの被害者は、現代人の特徴とは逆に、「死や悪」の方にリアリティがあり、「生や善」の側面を信じられないという印象があるが、いずれにせよ、その両者がつながり息づいていくことが重要であると感じられる。

本章で論じてきたように、スケープゴートの被害に遭うことで受ける影響力というものは、心理療法を通して消えてなくなってしまうようなものでは決してなく、むしろ、変わらずそれらを抱えてこれからの人生を歩んでいく、という方がイメージとして近いだろう。なるほど、スケープゴートとの同一化からは脱却できるし、スケープゴートにして救世主という自我肥大したアイデンティティも変化する。スケープゴートとの同一化から逃れていく過程において、「それは嫌だ」

という個としての欲求を表現できるようになり、スケープゴートにして救世主という自我肥大したアイデンティティを捨て去る過程の中で、「自分が悪いからいじめや虐待を受けるわけでもないし、そのような『悪』を自分が引き受ける必要も義務もない」と、その役割を放棄することができるようになる。このように、自分が認識して背負うべき「悪」と、自分が個人的な責任を果たす必要のない「悪」を区別し、一個人としての「私」—等身大の自分—を認識することは重要である。しかし、このように「悪」の犠牲になることを引き受けるのではなくノーと言うことを体得し、個人的な欲求や感情を表現できるようになったあとも、彼らは「悪」と特別な関係を結んでいるように筆者には感じられるのである。

先ほどのB子やC男は、心理療法が終了し、「個」としての欲求や限界を認識し、等身大の自分として振舞えるようになった後も、集団の中で起こっている問題—例えば、学級での友達同士のいざこざ—に仲裁に入るなど、集団という「場」が抱える問題に携わろうとする姿勢が感じられた。これは、これまでB子やC男がいじめや虐待という体験を通して、「個」としての自分を犠牲にさせられてきたような立場としてではなく、あくまで「個」としての欲求を持ち、「個」としての限界を認識しながら、「場」の問題に主体的に対処しようとしていた、という意味である。このような在り方は、「個」として立脚しながら「場」の問題に主体的に携わるという、「個」と「場」をつなぐ強さが求められるが、そのような在り方に基きながら、集団が抱える「悪」の問題にも関わるという姿勢が、B子とC男に見られたのである。筆者はこのような在り方(態度)を「主体的受容性」⁽¹²⁾と呼んでいるが、これは、ここまでずっと論じてきた「スケープゴート」とは逆の現象である。つまり、自分の中にある「悪」を否認して一部の人のせいにし、その人たちを攻撃するというスケープゴート現象とは全く逆に、集団が抱える「悪」の問題を解決すべく、それを自らのうちに取り込み—但し、その「悪」の犠牲になるという形では決してなく—、毒性を取り除こうと主体的に行動するのである。Neumannはこのような「悪」に対する態度を「代理受苦」と呼び⁽¹³⁾、スケープゴートという「悪」の対処方法に代わる、新しい「悪」の対処方法として提示している。つまり、B子やC男は、虐待やいじめというスケープゴートの被害に遭いながら、「目には目を歯には歯を」の論理でスケープゴートの加害者側に回るのではなく、集団において最も苦しく最も難しい役割を担おうとしていると言え、「悪」との新しい関係のあり方を我々に示唆してくれているとも言えるだろう。もちろん、虐待やいじめの被害に遭った人が、次は加害者の側にたち、延々と虐待やいじめの連鎖が続いていくという現実も確かにある。そこまで

いかなくとも、なかなかスケープゴートとの同一化から逃れられなかったり、新しい人生への一歩が踏み出せなかったりする人は多く居る。しかしその一方で、B子やC男のような人が居るのも事実であり、最も「悪」の犠牲に遭った人が、最もすぐれた「悪」への態度—「悪」との新しい関係—を示唆してくれているのもまぎれない真実なのである。

次章では、本章で明らかになった「悪」との新しい関係に基づきながら、現代人ひとりひとりが「悪」とどのような関わりをしていくべきなのかについて考察したい。

7. 「悪」と関わるということ

ここまで、「悪」を知る体験の必要性や、そのような体験の希薄さが「悪」の問題の氾濫を引き起こし、いじめの激化やスケープゴート現象の頻発につながることを指摘した。さらに、スケープゴート被害に遭う体験を通して、その被害者がいかに壮絶な「悪」の体験をしているかにも言及した。しかし逆説的だが、そこから「悪」との新しい関係が示唆されることも明らかになった。そこで本章では、そのような「悪」との新しい関係を参考にしながら、現代人ひとりひとりが「悪」とどのように関わるべきかについて考察する。

B子やC男の示した「悪」との新しい関係は、集団が抱える「悪」の問題を、自己犠牲的にならずとも、我がごととして捉え、対処していくというものである。しかし、B子やC男は、ただ単に集団が抱える「悪」の問題を、自分のことのように捉えて対処していただけないように思われる。つまり彼らは、集団が抱える「悪」の問題に携わりながら、同時に、そこに投影されているB子やC男個人のところに潜む「悪」の問題をも扱っていたのではないか、という印象を筆者は抱いたのである。つまり、集団の問題を扱うことと個人の問題を扱うことが同時的に起こっているのであり、「個」と「場（集団）」はどこかでつながっているのである。実は、「これは自分個人の問題だ」と思っていることが案外、集団が抱えている問題と密接につながっていることはよくある。そのような「つながり」をどこかで意識しておくことは、我々ひとりひとりにとって重要であり、自分自身の「悪」に向き合うことが、引いては、集団が抱える「悪」に対処することにつながっているという認識は大切である。B子やC男が示してくれた「悪」との新しい関係は、先にも述べたように、Neumannの言う「代理受苦」に重なると思われるが、Neumannは「代理受苦」について次のように説明している。

すなわち、「集合的なものの重荷の一部を、自らの責任のうちに取り込み、自らの内側でなされる変容の営みを通して、この悪から毒性を除去し、それを統合するのである。もしそれに成功すれば、少なくとも

当人のなかの悪からは救われるというそのことが、集合的なものの内部の救済に通じている」(邦訳, p150.)。

やはり、個人が自らのうちに潜む「悪」の問題に向き合うことと、集団が抱える「悪」の問題に向き合うことが、パラレルに起こっていると言えるだろう。

Neumannは代理受苦のみならず、現代人がこれから先身に付けていくべき倫理的な態度についていくつか指摘しているので、そこから、現代人ひとりひとりが身につけていくべき「悪」への関わり方について、さらに考えてみよう。

Neumannは、自分のこころの無意識的な部分を抑制したり抑圧したりすることなく、それを受容し、意識に編入しようとするのが大切であり、自分のこころの中にあるネガティブな側面も含めたこころ全体について責任を取る態度が必要である、と言う。それは、決して必要以上に善良になることが求められているのではなく、自身の心の中にある闇（悪）をしっかりと意識化し、それも勘定に入れながらふさわしい行動を取ることで、そして、その行動が個人（自分自身）だけではなく場全体へ及ぼす影響も合わせて考える姿勢を持つべきであることが指摘されているのである。さらに、何か行動をする際に、たとえその行動に道徳的な問題があっても、倫理的には善であると自らが判断し、その結果すべてに責任が負えるのなら、その行動は善であるとも述べている。

これらのことを筆者なりにまとめると、本論文の最初に述べた、「悪」を体験的に知ることなどを通して、まず、人は自分のこころに潜む「悪」を知り、それを考慮しながら行動することが必要であると言えるだろう。被虐待経験を持つC男の事例の中で、「死の側面—悪など—」と「生の側面—善など—」がつながりつつ流れていくという、あるがままの自然の流れが大切であると述べたが、このような善と悪は確かにこの世に存在しており、表裏一体の関係となっていていつもそこに在る。しかし、つい、人は自分の中にある「悪」や社会の中にある「悪」を無視し、「善」ばかりを見ようとする。生と死、善と悪が乖離しているのが現代社会の特徴だと先にも指摘したが、このような乖離を癒す態度を持つことが、現代人ひとりひとりにとって必要だと言える。さらに、やや極端な表現かもしれないが、善と悪という区別自体がそもそもナンセンスであり、生（死をも含んだ生）が孕むパラドクスを、生と死、善と悪というように、人が勝手に区別しているに過ぎないとも言えるのである。善悪を超えた、ただあるがままの「生（死をも含みこんだ生）」の現状に身を置く態度が求められているのかもしれない。

また、Neumannが、自分の行動が他者に及ぼす影響も勘定にいれることが必要だと述べたことについては、一人一人がしっかりと「道徳観」を持ち、自分の行為が他者に及ぼす影響力を認識するという「全体

的な視野」を持つことの重要性が示唆されているのではないだろうか。さらに、道徳的に問題があっても倫理的には善であると判断した場合は、その行動は善である、という指摘については、自分のこころの中にしっかりした「倫理観—善悪の判断—」を持ち、それに基づきながら自立的に判断することの重要性が指摘されているものと思われる。何かの行為をする際、それが道徳的に問題があるから行わないとか、あるいは道徳的に問題がなければ何をやってもよいというだけでは、単に外枠で自らの行為を規定しているにすぎない。そうではなく、己の内にしっかりした判断基準—倫理観—を持つことが重要である。ここがしっかりしていないからこそ、正しい理由のもとに間違ったことが行われる—他国の民主化のためだといって殺戮行為を繰り返したり、大義名分のもとにいじめを行ったりする—のである。ごく簡単に言えば、道徳観とは社会におけるルールであり、倫理観とは自分の中にある善悪の判断であるといえるが、その両者を個々人がこころの中でしっかりと樹立させることが必要であり、それに基づいて行動するという自立的態度を持つことが重要だと思われる。

現代社会においては、一方では「悪」の体験が希薄化しており、スケープゴートという形で自分の中にある「個人的な悪」すら他者になすりつけて、自分のものとして意識化せず、他方では、そのような「悪」の犠牲に遭い（スケープゴートの被害に遭い）、個人が引き受けねば以上の「絶対的な悪」を引き受けさせられている人がいると言える。たしかに、スケープゴートという現象は、「悪」の対処方法としてこれからも根強く残り、そう簡単に解消されることはないだろう。また、本章で述べたような、「悪」との関わり方も、必要不可欠ではあるものの大変厳しい倫理観が要求されているとも言える。だからこそ Perera⁽³⁾が、このような新しい倫理を身につけることができるのは一部の選ばれた人だけである、と述べているのである。しかし、「悪」の犠牲になったスケープゴートの被害者の心理療法を通して、「悪との新しい関係」が明らかになっている以上、現代人ひとりひとりが、本章で論じてきたような、悪との関わり方や倫理観に開かれた態度を示していくことが必要だと感じられる。つまり、「悪」を我がごととして捉えて生きていくという姿勢が求められているのである。それは、善良で完全な人間になろうとすることではなく、むしろその反対に、「悪」も含みこんだ全体的な人間であること—不完全にすぎない自己—を認め、引き受けていくことであり、それこそが現代人ひとりひとりに求められている「悪」との関わり方なのではないだろうか。

8. おわりに

前章において、現代人ひとりひとりにとって必要な

「悪」との関わり方について述べた。もちろん、「悪」と関わるとか我がごととして捉えるといってもそれは容易ではないし、「悪」があまりに破壊的であれば、自分が押しつぶされてしまうことにもなりかねない。そのようなときは、強大な「悪」から一気に逃げるしかない場合もある。また、Perera が、選ばれた人だけが厳しい倫理観に基づく行動様式を身につけることができる、と述べているように、たしかに、B子やC男のような人は選ばれた人（スケープゴートにして救世主という意味で選ばれているのではなく、「悪」への新しい関わり方を身につけられるだけの強さを持っているという意味で選ばれている）のかもしれない。しかしだからといって、それ以外の人が何もしなくてよいということではないであろうし、先にも述べたように、個人が自らのうちに潜む「悪」に向き合うことは、場が抱える「悪」の問題に携わることもつながるのである。

本論文で述べてきたことは、「悪」に纏わるほんの部分的考察であるが、ここで論じたことは、筆者が実際の心理療法を通して体得したことがベースになっている。スケープゴート被害に遭った人との心理療法において、筆者は、「悪」の深淵さや生に纏わるパラドクスを目の当たりにし、時には言葉を失うほどの衝撃を受ける。しかしそのような体験を通してこそ、現代人ひとりひとりがどのように「悪」と向き合うべきかについてさまざまな知見が得られている、とも感じている。今後も、実際の心理療法を通して得られたことをもとに、「悪」との関わり方について考察を深めていきたい。

9. 文献

- (1) 森田洋司・清水賢二、『いじめ—教室の病—』、金子書房、1986。
- (2) 河合隼雄、『子どもと悪』、岩波書店、1997。
- (3) Perera, S. B., *The Scapegoat Complex—Toward a Mythology of Shadow and Guilt*, Inner City Books, Toronto, 1986. (河東仁 田口秀明訳、『スケートゴート・コンプレックス—影と罪の神話学への試み—』、大明堂、1992)。
- (4) Neumann, E., *Tiefenpsychologie und neue Ethik*, 1948. (石渡隆司訳、『深層心理学と新しい倫理—悪を超える試み—』、人文書院、1987)。
- (5) Herman, J. L., *Trauma and Recovery*, Harpercollins, Inc., New York, 1992. (中井久夫訳、『心的外傷と回復』、みすず書房、1996)。
- (6) 厚生労働省 精神・神経疾患研究委託費外傷ストレス関連障害の病態と治療ガイドラインに関する研究班 主任研究者 金吉晴、『心的トラウマの理解とケア』、じほう、2001。
- (7) 廣澤愛子、『被虐待経験とてんかんを抱える女兒との面接過程—スケープゴート・コンプレックスをめぐる—』、『箱庭療法学研究』、vol.16(1), p.p.75-90, 2003。
- (8) 廣澤愛子、『「象徴的に物語ること」がもたらす「自己治療力」について—外傷体験を抱えた子どもの事例を通して—』、『箱庭療法学研究』、vol.18(1), p.p.49-69, 2005。

「悪」と心理療法

- (9) 廣澤愛子, 「スケープゴートに関する臨床心理学的一考察」, 『愛知教育大学教育実践総合センター』, vol. 7(1), p.p. 319-327, 2004.
- (10) 秋田巖, 「心理療法と人間—Disfigured Hiro 試論—」, 『心理療法と人間関係』, 講座心理療法第6巻, p.p. 113-p.p. 153, 2001.
- (11) 河合隼雄, 「『物語る』ことの意義」, 河合隼雄編『心理療法と物語 (講座心理療法第2巻)』, 岩波書店, p.p. 1-p.p. 20, 2001.
- (12) 廣澤愛子 「『現代女性の自己実現』と『女性性による癒し』に関する一考察—主体的受容性を巡って—」『大阪大学教育学年報』, vol. 7, p.p. 181-p.p. 192, 2002.

(平成18年9月19日)